

下村寅太郎の哲学に向かう

樽沼範久

「非常時も単に今日の一時的状況ではない。歴史の裡に主体的に生きている者にとっては、今日は常に決定を迫られている危機すなわち岐路である」¹。

「真の世界史はこれらの多様な全民族が——全人類が一つの共通の悲劇の主人公あるいは共演者となるという意識を共有する時に初めて現実的に成立するというべきであろう。これは未だ遙かな理念に見えるが、しかし現代の世界的状況は急速にこれの実現の迫っていることを感じさせる」²。

岐路や危機の時に聴こえてくるもの、開けてくるものもあるのではない。たくさん問題を完全に解決することはどうやら不可能な複雑な世界に、わたしたちは生きている。おそらくわたしたちは難しい状況にある。仮に「今や今日の「都会」の中で——最も「近代」である「都会」において、我々が遭遇する最大の敵はただただ——我々の目に見えない細菌である」としても、我々の目に見えないウイルスであるとしても、「もはや自然の暗黒の危険は存在しない」としても³、「暗黒の危険」はどうやら「自然」をも織りこんだ現代社会の領域にたくさん複層的に存在している。今日の「都会」で「我々が遭遇する最大の敵」にても、それは現代社会の「暗黒の危険」を表現するところの世界史的要素ではないか。

しかし同時に、われわれはポール・ゴーギャン（1848-1903）の問い＝
絵画《わたしたちはどこから来たのか わたしたちは何者か わたしたちはど
どこへ行くのか（D'où venons-nous? Que sommes-nous? Où allons-nous?）》
（1897-98）にならない、複層的な状況を描くなかで簡潔な問いから始めるこ
とが大切ではないか。「明日の世界」はどのような世界だろう。われわれ、
そしてわれわれの同胞（それは人間だけではない）、さらには、われわれ
の末裔や同胞たちの末裔は、どのような「明日の世界」に生きるのだろうか。
われわれはどのような世界に生きていくことを欲するのだろうか。

1. 多様における統一

《わたしたちはどこから来たのか わたしたちは何者か わたしたちはど
どこへ行くのか》をゴーギャンが描き始めたその年には、若くしてパーゼル
大学教授に就いたフリードリヒ・ニーチェ（1844-1900）をも震撼させた
スイスの歴史家ヤコブ・ブルクハルト（1818-1897）が、偶然ながら亡
くなっている。彼の没後に弟子がまとめ、『世界史的考察』として刊行さ
れた1868-72年のパーゼル大学講義で語るように、ブルクハルトは世界史
を連続的な発展とは見なしていない。非連続の歴史における危機や岐路に
直面して反復される人間の、生きるための闘い——「現在もそうであり、
過去においてもつねにそうであった、そして未来においても変わることに
ないであろう人間の耐え忍び、先を目指し、そして行動する姿」——を焦
点に、「歴史を横切る横断面」を「病理学的手法」によって描き出そうと
した⁴。

そしてこのブルクハルトに熱中したのが、京都帝国大学文学部哲学科に
おける西田幾多郎（1870-1945）や田邊元（1885-1962）の高弟のひとりで
あり、「京都学派」の一翼をなす哲学者、下村寅太郎（1902-1995）である。

下村は木村素衛（1985-1946）、九鬼周造（1888-1941）、戸坂潤（1900-
1945）、西谷啓治（1900-1990）はもちろんのこと、鈴木大拙（1870-1966）
や井筒俊彦（1914-1993）とも交流があった哲学者だ。東京文理科大学（東
京教育大学）や学習院大学の教授を務め、1966年の東京教育大学定年退
職後も1973年の学習院大学定年退職後も、長年にわたって研究を続けた。

20世紀を生き抜くなかで遺した著作は多岐にわたる。『ライプニッツ』(1938)、『自然哲学』(1939)、『科学史の哲学』(1941)、『西田哲学』(1947)、『精神史の一隅』(1949)、『ヨーロッパ遍歴 聖堂・画廊・広場』(1961)、『アッシシの聖フランシス』(1965)、『ルネッサンスの芸術家 精神的な研究』(1969)、『スウェーデン王女クリスチナ バロック精神史の一肖像』(1975)、『ルネッサンス的人間像 ウルビーノの宮廷をめぐる』(1975)、『レオナルド 遠景と近景』(1977)、『明治の日本人 雁のたよりIII』(1979)、『精神史の中の芸術家』(1981)、『ブルクハルトの世界 美術史家・文化史家・歴史哲学者』(1983) など。

下村の非常に幅広い研究領域は、『下村寅太郎著作集』各巻の題目からも一目瞭然だろう。1「数理哲学・科学史の哲学」、2「近代科学史論」、3「アッシジのフランシス研究」、4「ルネサンス研究 ルネサンスの芸術家」、5「レオナルド研究」、6「ルネサンスとバロックの人間像」、7「ライプニッツ研究」、8「聖堂・画廊・広場 ヨーロッパ遍歴」、9「ブルクハルト研究」、10「美術史・精神史論考」、11「哲学的問題」、12「西田哲学と日本の思想」、13「エッセ・ビオグラフィック」。

下村寅太郎は有名な第二次世界大戦中の座談会「近代の超克」(1942)の出席者でもあり、『西田幾多郎全集』(岩波書店、1947-53)と『田邊元全集』(筑摩書房、1963-64)の編集作業を担った中心人物でもあり、『ライプニッツ著作集』(第I期)全10巻(工作舎、1988-1999)の監修者の一人でもあり、湯川秀樹(1907-1981)や末綱愨一(1898-1970)たちと科学基礎論学会を1953年に設立した一人でもあり、『下村寅太郎著作集』(全13巻、みすず書房、1988-1999)刊行中には『AERA』40号(1992.10.06)の表紙を飾るほどだった。にもかかわらず、研究分野の多様性も原因で下村に関する論究は余りに少なく、いまだ「京都学派」の黒子のようなところがある。

「下村の業績をその全貌において捉える試みは、管見に入ったかぎりでは、今までなされたことがない」と大橋良介が『京都学派と日本海軍——新史料「大島メモ」をめぐる』(2001年)で指摘した状況は、現在もほとんど変ることがない。大橋はこう続ける。「その理由はふたつあるように思

われる。ひとつは、下村の業績の範囲が極めて広く、その学識および考察の深さを全貌においてフォローしようとする研究者が容易に育たなかった、ということだ。[…] 第二の理由は、彼がいわゆる京都学派の思想家として特に前面に出なかった、ということだろう」⁵。

『昭和前期の科学思想史』（2011年）編著者の金森修も序論で、こう記していた。「下村は、その業績の量と質に見合った扱いを依然受けていないという印象が強いが、それは、彼を総体として論じようとすればするほど、その全体像を描きにくいという内在的な理由があるからのように思われてならない。下村論は、今後、誰かに書かれるべき課題の一つだろう」⁶。

下村自身が最初の著書『ライブニッツ』（1938）の序文で書いたことは、まさに下村を論じるときにも、下村の言葉を参照するときにも、言えるのだ。「およそ個性の素描には大胆な線を引かねばならない。しかし拙い一画といえどもこれをして似ないものにするに十分である」⁷。

多様体を部分に縮減してしまえば、肖像画や似顔絵にしても似つかないものになってしまう。下村にとっても科学思想史の分野は大事であろうが、科学思想史などのひとつの分野で、あるいは例えば西田哲学を引き写したような何かひとつの概念で、この人物が進めた探求の多様体を割ろうとすれば、そこに「拙い一画」を描いてしまう危険性が高い。

むしろわれわれは、晩年に交友を結んだ井筒俊彦（1914-1993）が下村について書いたような「全体」を忘れてはならないだろう。「ルネサンス的人文主義の精神を実存的に生きてこられた先生のような思想家にあっては、数理哲学など、いわゆる本格的な研究から随筆、随想の端に至るまで、全体が一つの無限に開けた世界を構成しているのであって、全体そのものが、だから、そっくり主著なのだとも考えられるのではなからうか」⁸。

それは何でもありの散発性ということでも、どこをとっても構わない多源性ということでもない。「全体」という「無限に開けた世界」を表出する「中心」を、「全体」という「無限に開けた世界」を動かしていく統一された多様体の所在を、われわれは探し求める必要がある。それは下村がライブニッツについて言うのと同じことなのだ。「我々の哲学者においてこそ、[…] その意欲とその思索との帰趨する中心が求められねばならない」⁹。

さらに下村は晩年、自らの主著の不在をめぐって、こうしたことまで吐露している。「自分の著作は自分のやったことの一部にとどまっていると思わざるを得ない。真の著作遍歴は著作の外に出ていること、著作の外で自由に動いていたということである。真の著作遍歴は著作以外にあるとすらいえる。「主著」がないゆえんである。主著のないことを主著とするといってよい。自分は未完成者 *infitino* である」¹⁰。

これを文字通りに受け取るならば、この個性を描写する線を著作の外から引かないと、そして外まで引かないと、下村寅太郎の「真の著作遍歴」はたどれないということになる。「主著のないことを主著とする」という意味での「主著」は、読むことができないことになる。逆に言えば、「真の著作遍歴」をたどることの潜在性、「主著」を読むことの潜在性に下村の思索は開かれている、ということではないか。やはりライブニッツについて下村が注意したように、これはただの分散でも中断でもないはずだ。「分散を必然的に要求する所以のものを考え、同時にまたそれにおいて(…)未完結における完結、発散における統一——多様の統一ではなく多様における統一を」¹¹。

それにしても「真の著作遍歴は著作の外に出ている」「真の著作遍歴は著作以外にあるとすらいえる」とは、一体どういうことなのか。ひとは晩年に至れば至るほど、「自分の著作は自分のやったことの一部にとどまっていると思わざるを得ない」だろう。「著作の外で自由に動いていた」と思わざるを得ないのは、なにも下村に限らないのではないか。

しかしながら、ここには下村寅太郎に固有の事情がある。下村に特有とまでは言えないだろうが、特筆すべきことには違いない。やはり晩年の回想から引こう。「プリムツァール会」という「小さな研究会のようなもの」で、録音テープに残した「潜在的著作」のことである。「プリムツァール」とは、それ自身と「一」でしか割り切れない素数 (Primzahl) のことであり、同じ「京都学派」の西谷啓治から下村がもらった号「プリムツァール」にちなんだものだ¹²。

もう一つ data として附加しておく。教育大学を定年退職した後、

若い卒業生諸君がなおも私の話を聞きたいとして、いつの間にか小さな研究会のようなものになった。学習院大学の定年退職後も続き、集会する場所に困り、彼らは使用料のいらない場所を求め、しばらくは転々としたが、最後に世話役は手ずるを求めて半蔵門会館の一室を借りることになり、自分の話にはぜいたくすぎるといのだが——今日まで続いている。すでに十年以上になる。隔月に一回、しかし題目はもっぱら自分のその時その時の興味にしたがって変り、したがって一貫していない。[...] テープを貰うがすでに数十個になっている。未だ一度も再現したことがないが、これを文章にすれば数十篇の講演集になり、手を加えれば数十冊の本になる可能性がある。おそらく可能性にとどまるであろう。気心の知れた仲間を相手に、自由なテーマで成熟・未熟の論考を大胆に構想し、まとめることのできる機会になり、自分にとってはきわめて楽しい会合である。

哲学的テーマに限らない。飢餓の世界史、精神史としての戦争、科学革命、現代の終末論、都市の世界史、等々の類である。全体として一定の計画プランはないが、結局、自分の関心に属するかぎりは、どこかでつながりをもっているであろう。これは今までの経験である。テープの存するかぎり潜在的著作と称してもよいであろう。ブルクハルトの伝記によれば、彼はバーゼル市民のための公開講演を何度となく行っており、その中の若干のものが著作集に掲載されている。¹³

この「data」を下村が遺したのは、『ブルクハルトの世界 美術史家・文化史家・歴史哲学者』（1983）を執筆していた頃のことだが、この「きわめて楽しい会合」は下村が没する1995年1月22日の直前、1994年10月8日まで継続された。頻度に変動はあるが二十年以上ということになる¹⁴。

「テープの存するかぎり潜在的著作と称してもよいであろう」とは、必ずしも強弁ではないだろう。「彼を総体として論じようとすればするほど、その全体像を描きにくいという内在的な理由があるからのように思われてならない」と金森は述べていたが、その「内在的な理由」のひとつは——

もちろん、ひとつの理由でしかないが——、この「潜在的著作」の存在にあったのではないか。「成熟・未熟の論考を大胆に構想し、まとめることのできる機会」だというのだから、「真の著作遍歴は著作の外に出ている」と下村が書いたことの内実は、この「潜在的著作」の存在にあるのかもしれない¹⁵。

何れにしても「潜在的著作」の所在も意識しつつ、下村の「潜在的著作」の「線」をいわば顕在的著作に合流させることで、下村寅太郎の思考の「真の」「全体」を、「分散を必然的に要求する所以のもの」、「帰趨する中心」、「多様の統一ではなく多様における統一」は、さらに究めがたくなるどころか、「個性の素描」のための豊富な「線」を与えてくれるはずだ。

2. 帰趨する中心へ

では、下村寅太郎という哲学者の個性を描くときに「索められねばならない」「その意欲とその思索との帰趨する中心」は、「分散を必然的に要求する所以のもの」は、一体どこにあるのだろうか。現時点では顕在的著作や既に文字化されている資料からの総合であり、また、結論から言えば単純に響くだろうが、この「中心」は世界史の哲学にあると考える。そして、おそらくは哲学も科学も芸術も、世界史の哲学の思索のなかで最大の意味を持つてくるのではないだろうか。

『著作集』が刊行開始された1988年に、下村は自身の長年にわたる探求について『毎日新聞』紙上でこう答えている。「まず世界史を哲学的にとらえたいかということ。さらに哲学史の見直し。たとえば、ヘーゲル哲学を外して考えるとどうなるか。もう一つは、近代科学を考える上で欠かせない魔術の問題。これもなかなか面白い。ブルクハルトをやっていて改めて気づいたのですが、歴史の専門家としてではないブルクハルトに実に重要なところがある。しかし専門の歴史家はそこを見逃してしまうんですね […] 人間の精神や文化を本当に理解するには良い意味でのアマチュア、ディレッタントの目がどうしても必要です。いずれにしても、未完の魅力を語るべく自身も、いまなお未完成ということでしょう」¹⁶。

「プリムツァール会」での論考も「哲学的テーマ」に限らず、「飢餓の世界史、精神史としての戦争、科学革命、現代の終末論、都市の世界史、等々の類である」と述べられていた。いずれの主題も世界史の哲学という「全体」の、大事な「部分」を構成することが予想される。

また、『ブルクハルトの世界 美術史家・文化史家・歴史哲学者』（1983）執筆と並行する時期に、下村は学生時代に師事した西田幾多郎や田邊元と自分の「哲学的課題」「問題」をこう対比させている。「西田先生も田邊先生も、いずれもロジシアンであって、ヒストリアンではなかった。それは当代の哲学的課題の要求したものである。（…）しかし哲学者はヒストリアンであることは不可能であるか——がいつの間にか自分の問題となっていた」¹⁷。

そして最後の名著『ブルクハルトの世界 美術史家・文化史家・歴史哲学者』（1983）から遡ること約半世紀、すでに下村は最初の単著『ライプニッツ』（1938）から、宇宙をも包括するライプニッツを通して、世界史の哲学への「線」を描いてもいる¹⁸。ライプニッツを世界史の哲学という問題から把握しようとする下村の明確な視座を、われわれは論考「スピノザとライプニッツ」（1969）にも見出す。それは前後して書かれた論考「世界史の可能根拠について——歴史哲学的試論——」（1968）とともに、ライプニッツの時代と1960年代末という20世紀のもうひとつの世界史の転換期を接近させ、問題の位相を響き合わせるのだ。

この時代の見であって同時に来るべき時代を設計しようとする者がライプニッツである。ドイツが三十年戦争の戦渦から立ち直るには、ほとんど一世紀を要した。[…] 戦争の直接の損害より根本的に重大であったのは、社会秩序の崩壊、権威や宗教の不断の変化動揺、それがもたらした社会の解体である。[…] 我々の哲学者ライプニッツがあえて講壇の生活を捨て、広い世間に出て活動することを意欲した動機には、かかる背景が想定されてよいであろう。この課題は哲学と宗教と政治とにまたがる。具体的には、分裂対立した宗教的信条の再統一、再統合、それにつながる政治的問題である。これを根本的に基礎づけることは哲学の使命である。これら一切にわた

るものがライブニッツが自らに課した問題である。彼の哲学が志向するものはこれなしには理解しがたいであろう。[...] ライブニッツの遠大な世界史的活動 [...] 19

20世紀の世界史の転換点である第二次世界大戦の最中に行われ、下村寅太郎（1902-1995）も参加した「近代の超克」（1942）と並んで激しい議論的になってきたもうひとつの座談会「世界史的立場と日本」（1941-42）——ホー・ツーニェン／YCAM《ヴォイス・オブ・ヴォイド——虚無の声》（2021）でも焦点になった座談会——など、同じ「京都学派」の高坂正顕（1900-1969）、西谷啓治（1900-1990）、高山岩男（1905-1993）、鈴木成高（1907-1988）の世界史の哲学と、下村が生涯追い続けた世界史の哲学との差異も含め、下村寅太郎の哲学の「分散を必然的に要求する所以のもの」、そして「帰趨する中心」を世界史の哲学に見出すとき、まだまだ論究すべき問題は大量にある。

座談会「近代の超克」や著書『科学史の哲学』などで展開された下村の特異な「機械」の哲学については、樽沼範久「1942年と下村寅太郎-三木清の技術論」（表象文化論学会・第11回大会 パネル「テクネーとエピステーメ」、2016年7月10日）や、樽沼範久「物質-機械の歴史存在論——下村寅太郎哲学の生成」（表象文化論学会・第13回大会 パネル「批判的京都学派の技術論——その現代的含意と可能性」、2018年7月8日）などで発表してきたこととも合わせて、別稿でさらに展開することとしよう。

本稿は最後に下村寅太郎の京都一中（旧制京都府立第一中学校）の同級生である今西錦司（1902-1992）が、1942年11月22日付けで下村に宛てた手紙を引用して、閉じることにしたい。これもまた世界史の哲学にかかわることであり、下村が探究し続けた来るべき世界史の哲学への接線になると思われる。

この間鈴木氏にねだって『歴史的国家的理念』一冊をものにし [...] 二度読んだ。鈴木氏は歴史家だが、ほんとうに現実の歴史、歴史的現実がつかぬかかれていたら、もっと確信を持って未来の洞察を開陳すべきである [...] 鈴木氏も大衆とともに時代の波間に動揺してい

るとしか思えない […] 高山岩男氏なども鈴木氏と似通った考えらしいが、そんなことをいいふらすようでは却って小生は日本のために有害だと思う […] 否、それが京都哲学界一班の傾向であるならば、京都の学界それ自身があまりに情けなさすぎる。勉強の仕方でも似通っているし、事実を事実として認めないで余りに人の話にたよって学問の上すべりをしすぎている。 […] 世界史という看板をかかげてみた処で、どんな看板をかかげてみたところで、もとがきまっているのだから、もういまに行きつまってろうことは火を見るより明らかだ。〔鈴木〕成高などは小生の『生物の世界』の歴史についてを面白く読んだといっているくせに一つもわかっていない。 […] 高坂氏の『民族の哲学』高山氏の『世界史の哲学』など読んでもつまらないような気がする。しかし小生は読んでこれを批判し、これを超克しなければいけないと思ひ、この間から本屋をさがしている […] 弘文堂でこんど出す世界史体系その題目と顔触れとを見たが、やはりあの中に進化論がとり上げられていないということを以って、僕は哲学者史学者の世界観を略々推察できるのである。君もその一人だろうか。まさかと思っいま筆を走らせているのである²⁰。

この手紙を終生とおいた下村は、今西の厳しい問いかけに対して、自分も「その一人」と考えていたのかどうか、それもまた論究すべき問題である。

註

1. 下村寅太郎『科学史の哲学』（1941）、『下村寅太郎著作集1 数理哲学・科学史の哲学』、みすず書房、1988年、308頁。
2. 下村寅太郎「世界史の可能根拠について——歴史哲学的試論——」（1968）、『下村寅太郎著作集11 哲学的問題』、みすず書房、1997年、542-543頁。
3. 下村寅太郎『科学以前』（1948）、『下村寅太郎著作集1』、前掲書、12頁。
4. ヤーコブ・ブルクハルト『世界史的考察』、新井靖一訳、ちくま学芸文庫、2009年、12-16頁。

5. 大橋良介『京都学派と日本海軍——新史料「大島メモ」をめぐる』、PHP新書、2001年、130-131頁。大橋の挙げる第一の理由に関係することだが、下村は晩年に思わずこう漏らすこともあった。「自分は評価されたことがないのは、自分の方が評者よりよく知っていたからである。評価し得る人がいなかったことである」(下村寅太郎「著作遍路或いは自画自賛」〔1982-85、未定稿〕、『下村寅太郎著作集13 エッセ・ビオグラフィック』、みすず書房、1999年、414頁)。
6. 金森修「〈科学思想史〉の来歴と肖像」、金森修編著『昭和前期の科学思想史』、勁草書房、2011年、21頁。また金森は、「日本の学会は今なお下村の世界を消化できぬままにとどまっている。下村は理解されていない。日本の学会にとって、彼は相変わらず「知られざる大地」なのだ」とも書いていた(金森修「下村寅太郎とその機械観」〔2008〕、金森修『東洋／西洋を越境する——金森修科学論翻訳集』、小松美彦・坂野徹・隠岐さや香編、読書人、2019年、161頁)。なお、金森修編著『昭和後期の科学思想史』(勁草書房、2016年)には板橋勇仁の論文「下村寅太郎という謎——『精神史』としての科学思想史と『自己否定の自覚』」が掲載されているが、西田哲学の用語に引っ張られた結果、題名の通り謎が謎のまま終わったと言わざるをえない。
7. 下村寅太郎『ライプニッツ』(1938)、『下村寅太郎著作集7 ライプニッツ研究』、みすず書房、1989年、5-6頁。
8. 井筒俊彦「下村先生の『主著』」〔下村寅太郎著作集への推薦文、『みすず』第30巻第2号〔No. 325〕1988〕、『読むと書く——井筒俊彦エッセイ集』、若松英輔編、慶応義塾大学出版会、2009年、449頁。
9. 下村寅太郎『ライプニッツ』、『下村寅太郎著作集7』、前掲書、8頁。
10. 下村寅太郎「著作遍路或いは自画自賛」、『下村寅太郎著作集13』、前掲書、414頁。
11. 下村寅太郎『ライプニッツ』、『下村寅太郎著作集7』、6頁。
12. 「下村寅太郎の百年——年譜／著作目録」、『下村寅太郎著作集13』、629頁。
13. 下村寅太郎「著作遍路或いは自画自賛」、『下村寅太郎著作集13』、408頁。
14. 「下村寅太郎の百年——年譜／著作目録」、『下村寅太郎著作集13』、632頁。なお、最後の「プリムツァール会」の題目は「風景画の成立」だった。
15. 科学研究費基盤研究(C)「下村寅太郎の『潜在的著作』を集成する」(研究代表者：樽沼範久、課題番号：20K00094、2020-25年)は、この「プリムツァール会」の録音テープを発掘し、「潜在的著作」を可能な限り文字資料として集成するプロジェクトである。これには、東京教育大学で下村に師事し、「プリムツァール会」の常連でもあり、『下村寅太郎著作集』の資料収集を裏から支え、『下村寅太郎著作集10 ブルクハルト研究』(みすず書房、1994年)の月報にも文章「下村先生の講義など」をご寄稿されている小宮山恵三郎氏の存在が大きい。偶然にも小宮山氏が樽沼範久の父・繁明の旧友と判ったこともあり、小宮氏のご協力を幸運にして得ることができた。新型コロナウイルス感染症の世界的流行が2020年から続くなか、小宮山氏のご健康に負担をかけないよう、このプロジェクトを進めていく。下村の知られざる側面の発見にとどまらず、国内外で日本近代思想史の焦点であり続けている「京都学派」の思想研究にとっても、20世紀精神史の一局面を採掘する思想／アイディアの考古学にとっても、面白い学術的資料になるだろう。
16. 「初の著作集…下村寅太郎氏に聞く」、『毎日新聞』1988年9月21日、「下村寅太郎の百年——年譜／著作目録」、『下村寅太郎著作集13』、前掲書、629頁。
17. 下村寅太郎「著作遍路或いは自画自賛」、『下村寅太郎著作集13』、344頁。また、これと同趣旨の次の言葉も書き残されている。「著作者としての自分は問題そのものの論究よりも「問題」の叙述により関心を惹かれている。Historianであって、logicianではなかった。先師たち、西田先生も田邊先生も、徹底的にlogicianであった。しかし自分もいかに矮小であっても哲学の徒として単にhistorianであることに住したの

でなく、historianで哲学者であることはできないかをつねに意欲した。当初、数理哲学を志しながら数理そのものよりも数理思想の発展に対する関心に傾斜した」（同前、414頁）。

18. 「ライプニッツは単なる学究でもなく、単なる實際家でもない。そうではなくして彼自身の願望は世界的である。普遍的な世界の形成とそれの学問的組織にある。[...] 司書、法制、外交、史官としての実際的な活動や万般の計画や献策と同時に、一人の世界人として一侯国のことを越えた世界的な計画やその実現に努力している——この故に後世彼を非愛国者と評する者すらある。彼の献策のうち採用せられ、彼に委せられたものは、もとより遠大な文化的計画でなく、実利的なウェルフエン家の歴史の完成やハルツ鉱山の改修工事である（一六八一年）。しかし本来このような一侯国の利害に関するものといえども、我々の哲学者においては単にそれに止まることなく [...]、この無縁な二つの労作がライプニッツの頭脳の中に総合されて有縁のものとなる。——ハルツで見た化石や岩層の探査が一般化されて全地球の先史の問題になり [...]、他方、ウェルフエン家の系譜の調査 [...] は欧州諸王家の一般史に拡張されることになり、さらにこの両者が結合されて、先史時代と有史時代とを結びつける前代未聞の大規模の修史のプランが企図されることになる。[...] ライプニッツの「地球前史」(*Protogaea*)、「欧州王朝編年史」(*Annales imperii occidentalis*) はかくして世界史の、否、宇宙史の一部となるのである。ここに我々の哲学者はこの時代における最も卓抜な歴史家となる」（下村寅太郎『ライプニッツ』、『下村寅太郎著作集7』、35-38頁）。
19. 下村寅太郎「スピノザとライプニッツ」（1969）、『下村寅太郎著作集7』、267-269頁。なお、下村は学習院大学の最終講義で、ライプニッツの「モナド」を援用しながら、来るべき世界史の哲学をこう予告している。「真に一つの世界史はこれから始まる。これは確かに、完全に新しい世界である。しかし未だ物理的に一つの世界であって、未だ精神的な統一性はない。これがまさしく今後の課題である。[...] 新しいMonadologyが今後現われ得べき世界史の哲学であろう」（下村寅太郎「最終講義II 私の哲学的問題——学習院大学——」[1973]、『下村寅太郎著作集11 哲学的問題』、前掲書、680頁）。
20. 「下村寅太郎の百年——年譜／著作目録」、『下村寅太郎著作集13』、前掲書、593頁。

（都市イノベーション研究院・教授）